



2023年11月 第21巻 第11号

### かく語りき—聖人の言葉

霊性は自ずと謙虚さをもたらす。花が実になれば、花びらはひとりで落ちるだろう。人も霊的になると、エゴは徐々に自然に消えるのだ。実をつけた木は常にこうべを垂れている。謙虚さは偉大さのしるしなのだよ。

…シュリー・ラーマクリシュナ

誠実に義務を成すことで、最高の目標に達することができます。それがダルマです。これは簡単なことではありません。鋭い知性がなければ、義務を認識して適切にやり遂げることはできませんから。そして、揺るぎなく神を瞑想するには、強い心が必要です。強い心を身につけるために必要なのは道德的規律です。つまり、義務、規律、信仰という三つすべてが必要なのです。

…シヴァプリ・ババ

### 今月の目次

- ・かく語りき—聖人の言葉

- ・お知らせ
- ・2024年1月の生誕日
- ・2023年伊豆サマーリトリートの報告  
レオナルド・アルヴァレス
- ・2023年伊豆サマーリトリートで語られた物語  
スワミー・ディッヴィヤーナターナンダ
- ・忘れられない物語
- ・今月の思想

### お知らせ

各プログラムに参加を希望される方はご一報ください。

- ・日本ヴェーダータ協会の行事予定はホームページをご確認ください。

<https://www.vedanta.jp.com/>

### 2024年1月生誕日

ホーリー・マザー・シュリー・サーラダー・デーヴィー 1月3日(水)

スワミー・シヴァナーナンダ 1月7日(日)

スワミー・サーラダーナンダ 1月16日(火)

スワミー・トゥリーヤーナンダ 1月24日(水)

2023年9月8日～10日

## 伊豆サマーリトリートの報告 レオナルド・アルヴァレス

ヴェーダーンタ協会の夏の合宿は、伊豆半島の山中にある寺院に併設された、僧侶の娘さんが運営する小さな宿坊「禅の湯」で行われました。

マハーラージは二日間にわたって、瞑想を実践する目的、つまり平安、至福、解脱を得ること、神だけが実在で永遠で他のすべては一時的なものであること、そして神だけが私たちの永遠の伴侶であり友人であることを知ることの重要性について話されました。

その目的に達するためのさまざまな種類の瞑想と霊的实践が講義の主な要点でした。例えば、マントラを繰り返す（ジャパム）、実在と非実在を識別する（ヴィヴェーカ）、すべての中に自分のイシュタ・デーヴァター（理想神）を見る、観察者として心を観察する、などです。これらはすべて、さまざまな状況で役立ちます。とりわけ、実生活の中で、数々の誘惑に直面するマーヤーの幻惑力の世界において、永遠のものと儚いものとの識別（ヴィヴェーカ）を実践することは、私たちの霊的進化の真の試練であり、非常に役に立ちます。

一部の人々が何年も（霊的）進歩をし

ない理由の一つは、現実世界の状況の中で識別を行っていないからです。もう一つの理由は、欲望、執着、悪い習慣を手放したくないことです。私たちが日々考えたり想像することは、小さな波として蓄積され、唐突に暴力的で壊滅的な津波となって押し寄せ、すべての識別、瞑想、苦行（タパッシャー）を押し流してしまいます。津波が高まってから止めようとしても手遅れです。それを避けるためには、私たちは上記の識別、ジャパム、瞑想の技術を組み合わせ、日々絶え間なく実践をし、世俗の波がまだ小さな波紋であるうちに根絶しなければなりません。

マハーラージはこの点を明確に理解させるために、リトリートの最初の夜の信者による賛歌詠唱のあと後に、ペルシャのイスラム教スーフィー派の聖者となったハーフィズの物語を語られました。ハーフィズは毎晩、日没の直前に、あるスーフィーの聖者の墓の前でろうそくに火を灯すことを習慣にしていました。彼はある時、とても美しい娼婦が二階建ての家のベランダに立っているのを偶然見かけました。この娼婦は非常に有名な高級娼婦で、上流社会の人々を顧客としていました。それに対してハーフィズはぼろを着た貧しい男だったので、彼女と過ごす余裕などまったくありませんでした。それでもひるむことなく、彼は何とかして彼女の注意を引こうとしました。彼は毎

朝、夜明け前の早い時間に、娼婦の広くて美しい庭に行き、草木の剪定をし、花に水をやり、掃除をすることにしました。この娼婦は、使用人にこの仕事をさせていませんでした。しかし驚いたことに、突然、庭がとてもよく手入れされ、毎朝きれいになるようになりました。

数日後、娼婦は使用人たちに「明日から早起きして、誰がこれをしているのか見てちょうだい」と言いました。使用人たちは言われた通りしました。翌朝、ハーフィズが庭に入り、草木や花の剪定、水やり、掃除などの毎日の庭仕事を始めると、彼らはハーフィズを捕まえ、娼婦の元に連れて行きました。ハーフィズが愛する人の前に行くと、娼婦は「なぜそんなことをするのですか？」と尋ました。ハーフィズは、「私はあなたに恋をしました。しかし一緒に過ごすことは無理なので、あなたの気を引くために、庭を美しく清潔にして、すこしばかりあなたにお仕えしようと思いました」と答えました。ハーフィズの誠実さに心を打たれた娼婦は、「今夜いらしてください。お代はいりません」と言いました。それから使用人たちにハーフィズを沐浴させ、高級な衣服を着せるように命じ、その後には彼を家に送り返しました。

家にいる間、ハーフィズは愛する人に会えるのを指折り数えて待ちわびまし

た。ついに夕暮れが近づき、願いが叶う幸せを想像して胸が高鳴りました。娼婦の家に向かって歩き始めていたとき、突然彼は、毎夕欠かさずスーフィーの聖者のためにろうそくに火を灯している、ということ思い出しました。さて、困ったことになりました。ハーフィズは世俗的な欲望を満足させるべきでしょうか？（プレーヤ）それとも神聖な日課を守るために喜んでその望みを犠牲にするべきでしょうか？（シュレーヤ）。義務と欲望の間で引き裂かれたハーフィズは識別をして次のように結論付けました。「今夕、スーフィーの聖者のためにろうそくを灯すのをやめるわけにはいかない。その後で彼女の所へ行こう！」

そう決心して、大慌てで聖者の墓に行くと、二人の男が土壺で酒を飲み、高らかに笑い、恍惚の状態で歌を歌っているのが見えました。彼らはハーフィズを見て「君もこれを飲みなさい！」と言いました。それが酒だと思ったハーフィズは、酒が大嫌いなので「いいえ、私はイスラム教徒なので酒は飲みません」と言いました。二人の男は笑いながら歌い続け、もう一度ハーフィズに飲むように言いましたが、ハーフィズはまたしても断りました。すると二人は土壺を地面に投げつけたので、土壺は割れて酒はこぼれてしまいました。

その時、ハーフィズは「ああ、せめて一口だけでも飲んでおけば良かった。彼らはあんなに幸せそうなのだから！」と思いました。そこで、ハーフィズは二人に少し下さいとお願いしましたが、彼らはこう言ってハーフィズを非難しました、「私たちが勧めたときに飲むべきだったよ。壺が割れて飲み物はこぼれてしまった」。少し間を置いてから、彼らは穏やかに「でも、まだ数滴残っているかもしれないから、舌を出して舐めてみてはどうだい？」と言いました。そうすすめられたハーフィズは割れた壺の中に幸運にも数滴見つけ、それを舐めてみました。するとすぐに、抑えられないほどの至福が心の奥底から激流となって湧き出し、酩酊状態になったので、ハーフィズも大笑いして歌い始めました。

しばらくして、ハーフィズはまだ喜びに震えながらも少し落ち着きを取り戻したので男たちに「これは何の酒ですか？」と尋ねました。「これは普通の酒ではありません、神の愛の酒です」と本当は天使である二人が言いました。

一方、ハーフィズを待っていた娼婦は、ハーフィズが来ないので心配になってきました。どうしたことかと興味をそそられた娼婦は、ハーフィズの様子を見に行くことにしました。誰かがハーフィズは毎夕スーフイーの聖者の墓でろうそくに火を灯すことを告げると、

娼婦はそこに急ぎました。そこで娼婦は驚くべき光景を目の当たりにしました。ハーフィズが恍惚状態で歌い、笑っていたのです。娼婦がこの光景を驚嘆の眼で眺めながら立ち尽くしていると、ハーフィズが彼女に近づき酒を一口飲ませました。すると驚いたことに酒が彼女の唇に触れた途端に、彼女の中にも抑えきれない喜びが湧き上がりました。こうして娼婦も至高神の愛のものと酒に酔いしれ、歌って踊りました。

この物語の教訓は、もしハーフィズが自分の低い欲望（プレーヤ）に従っていたら、自分自身を墮落させ、道を誤っただろうが、彼はスーフイーの聖者の墓で祈りろうそくを灯す、という良い習慣を続けることを選んだことで（シュレーヤ）、自分自身を救い、この上ない至福を経験しただけでなく、墮落した女性をも救い、神の愛の道へと導いたことです。

さて、話を巡礼に戻します。2日目に一行は「七滝」という場所へ向かいました。最初の滝はヒマラヤのガンゴトリのように勢いがありました。いくつかの滝を通過してから、マハーラージはある弟子に、「このような場所には一人で来て、沈黙と瞑想の中で一日を過ごすべきです、そうして初めて有益な効果が得られます」と話されました。また、水のせせらぎを聞きながらマハーラー

ジは、スワミージー（スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ）がヒマラヤでガンジス川の流れの多くの音を聞いたとき、その音が一日のうちの時間によって異なるインドのさまざまなラーガと調和していると述べられたことを話してくださいました。その後、一行はお茶と軽食をとり、クラシック音楽家であるアメリカ人の信者スティーブさんが「ウィ・シャル・オーバーカム」などの歌を数曲歌われ、皆を喜ばせました。

リトリートの最終日、グループは午前4時前にビーチへ出発しました。そこは、砂が白いことから「白浜」または「ホワイトビーチ」と呼ばれています（観光客が押し寄せる以前の30年前は、真っ白だったそうです）。そこで一行は海岸線に沿って一列になって座り、太陽が神の栄光とともに昇り、水平線の雲間から光が差し込むのを眺めながら瞑想しました。約1時間の瞑想の後、集まって座り、スワーミー・メダサーナンダの先導で、シュリー・ラーマクリシュナへの賛歌を一曲とホーリー・マザーの賛歌を一曲歌い、バガヴァッド・ギーターの第2章11～26節と70節を読み、マハーラージの説明を聞きました。

マハーラージは、11節から26節まではヴェーダーンタの本質を説明していると話されました。70節の意味は「無

数の河川が流れ入ろうとも、海は泰然として不動であるように、さまざまな欲望が次々に起ころうとも、それを追わず取りあわずにいる人は平安である」です。マハーラージがこの一節を選ばれたのは、一行が、運河から雄大な海に水が流れ込み、海は水が流れ込む水に動じないのを実際に見ていたからです。

宿に戻った後、マハーラージと一行は宿坊の女主人の父親が住職を務める寺院を見学しました。一行は、本堂、信者の名前が刻まれた位牌、僧侶と脇にいる三人の子供が座布団に座って瞑想をしている絵など数枚の絵を見学しました。お寺では定期的に坐禅会が開催されています。宿坊の女主人は、今は寺院を維持するためにほとんどの人がフルタイムの仕事に就かなくてはならないこと、寺院の活動が続くことを強く願っていること、宿坊を併設することでそれが実現できていることを説明なさいました。日本は宗教をほとんど失ったと言われていますが、昔からの伝統や霊的实践を守ろうとする熱心な信者が今もおられます。

## 伊豆サマーリトリートで語られた物語 スワーミー・ディッヴィヤーナターナンダ

### 「歯と舌」

ある僧院に、誠実で勤勉である反面、

短気で他の在院者たちによくけんかを吹っかける隠者がいた。ある時、彼は非常に憤激したので、全身は震え、口からは血がにじみ出始めた。彼は不安になってきたので、この問題の解決策を求めて師のもとに行った。師は、「さあ、この怒りが自分を殺していることを理解して、自分を正す方法を真剣に探みなさい」と言った。このことを説明するために、師は「おまえには歯は何本あるかね？」と尋ねた。弟子は「30本です。小さい頃に2本取れました」と答えた。

「舌は何枚ある？」と師が尋ねると、「一枚です」という即答が返ってきた。すると師は言った。「私たちは皆、同様の本数の歯と1枚の舌を持っている。しかし、食べ物を嚙んでいるときに、不注意から歯で舌を嚙んでしまい、血が出ることは知っているね。舌と歯の間には明らかに争いがあり、ほとんどの場合、歯が勝つ」「しかし、歯はゆっくりと虫歯になる。老人は若い人よりも歯が抜けていることもある。それに対して舌はずっとある。この世での最後の日まで私たちは一枚の舌で生きるが、すべての歯が無傷とは限らない。同様に、暴力的な人はすぐに消耗しエネルギーもすぐに枯渇する。しかし穏やかなものは、その強さと活力をより長く保つのだよ」

「吉報か凶報か」

中国のある農夫が駿馬を飼っていた。ある日、その馬が別の馬を連れて来た。これを見た隣人の一人が「吉報だね」と言った。農夫は「吉報か凶報かは誰にも分からない」と言った。

農夫は二頭目の馬を息子に与えた。息子はその馬に乗るようになってしばらく経ったときに落馬をして足を骨折してしまった。隣人は「凶報だね」と言った。農夫は「凶報か吉報か誰にも分からない」と答えた。

数日後、その土地の王の兵士が王の軍隊の新兵を徴兵するためにやって来た。兵士が農夫の家に行くと、怪我人の息子しかいなかった。息子は怪我をしたことで、徴兵から逃れられたのだ。もちろん吉報である！

### 「7通りの妻」

ゴータマ・ブッダがこの世にご存命だったころ、アナタピンダという男が住んでいた。彼の妻はスジャータと言った。スジャータはけんか好きで、よく他の家族とけんかをした。あるとき、お釈迦様はその地域を通りかかったとき、アナタピンダの家に泊まることになった。お釈迦様は数日間の滞在中にスジャータのけんか好きな性質を知られた。お釈迦様はスジャータを呼んでこうおっしゃった。「スジャータ、妻には七つのタイプがあることを知っていますか？」

「最初のタイプは殺人者のようです。彼女は不純な心の持ち主で、夫を尊重



せず、結果として別の男性に心を向けます。

2番目のタイプは泥棒のようです。彼女は夫が苦勞して稼いだお金を自分の肉体の快適さのために使い、必要であれば、ためらうことなく夫からお金を盗みます。

3番目のタイプは先生のように。彼女は家庭全体を支配し、夫やその他の家族の出来事の優位に立ちます。

4番目のタイプは友達のように。彼女はあらゆる面で夫を助け、重大な局面に直面すると必要に応じて役立つアドバイスをします。

5番目のタイプは姉妹のようなので、4番目のタイプと同様に、夫に全身全霊で尽くし、あらゆる事柄において夫を助けます。彼女は愛情深く思いやりがあり、姉のように夫の世話をします。

6番目のタイプは母親のような妻です。彼女は夫を我が息子のように世話をします。

最後に、召使のような妻がいます。彼女も夫に仕えています、黙って不平を言わず、何の期待もしません」

それからお釈迦様はスジャータに向かって「あなたはどのタイプの妻ですか？」と尋ねた。そこでスジャータは自分の間違いに気づき、どうすれば自分を正せるかを真剣に考え始めた。

### 「女主人と女中」

あるところに、優しく、礼儀正しく、控えめな金持ちの女性がいた。彼女は

大所帯で数名の召使いがいた。その中に頭がよくて機転が利く女中がいた。彼女は女主人の素晴らしい振る舞いが本物なのか、それとも環境が良いから優しいのか疑っていたので、調べてみることにした。

ある日、彼女はわざと部屋に閉じこもったまま、時間通りに仕事を始めなかった。女主人がどうしたことかと尋ねると、女中は「たった一日少し遅れたくらいで、イライラなさないでください」と言って女主人を怒らせた。翌日、女中が同じことを繰り返すと、女主人は部屋にやって来て、棒で女中をたたいた。この事件のニュースは他の召使いにも広まり、女主人の性質が皆に明らかになった。

### 「魔法の鉢」

ある朝、王が朝の散歩に出かけると、一人の物乞いがあらわれた。

「何が欲しいのですか？」と王は尋ねた。

「よくお考えください」という返事が物乞いから返ってきた。王はそのような返答を予期していなかったので驚いた。

「さあ、何でも欲しいものを言ってください。そうすれば届けます」と王は断言した。

物乞いはカバンから小さな鉢を取り出して、「この鉢を満杯にしてくださるなら、何でも構いません」と言った。そこで王は家臣たちに、「宝庫からダイヤ

モンドを持ってきて、その鉢に入れよ」と命じた。

しかし驚いたことに、ダイヤモンドはその鉢に入れた途端に消えてしまった。皆が自分の目を疑った。王は「もっとダイヤモンドと宝石を持ってきて、その鉢に入れよ」と命じたが、何度やっても同じことが起こった。そのニュースは燃え広がるように王国中に広まった。

そこで王は物乞いに向かって、「すみませんが秘密を教えてください」と言った。

物乞いは、「これは人間の頭蓋骨です。それを鉢に見えるように磨きつづけています。この中に何を入れても消えてしまうのです」と言った。

この物語には隠された意味がある。私たちの欲望は満たされることがない。一つの欲求が満たされると、また別の欲求があらわれる。私たちは常にもっともっと欲しいのだ。しかし、肉体的快適さ、権力、威光、名声、評判など、私たちが得るものはすべてすぐに消えてしまい、私たちの欲望が満たされることはない。私たちの鉢はいつも空っぽなのである。何百万もの人々のうち、外側に何も求めない人が僅かだがいる。彼らはあらゆる欲望を遠ざけ、最終的には内側から満たされる。

### 「金の杖」

ある時、墓の近くに住んでいる人が墓の中から声を聞いたが、怖気づいて墓

に近づけなかった。彼はそのことを友人に告げた。その友人はそれほど臆病ではなかったので、その出来事について調べてみることにした。次の夜、彼が墓の近くにいると、真夜中に同じ声を聞いた。彼がその墓を掘ってみると、「私は黄金の宝です。あなたの友人に自分自身を差し出したかったのですが、彼は怖がって私に近づくことができませんでした。もしお望みでしたら、あなたに差し上げます」という声が聞こえた。「でもどうやって私のところに来てくれるのですか？」と男が尋ねると、「明日、沐浴をして、部屋をきれいにしておいてください。私たちは修道士の衣装を着て行きます。私たちのために別の部屋を用意しておいてください。私たちは部屋に入って金のつえに変身します」と声が言った。

男は言われたとおりに、沐浴をし、部屋を掃除した。約束の時間になると8人の僧侶たちがやって来て、軽食をとり、次の部屋に入るとすぐに金のつえに変身した。

この出来事を聞いた村の別の男は宝が欲しくなり、8人の僧侶を家に招いた。僧侶たちがやって来たが、彼らは乱暴で荒っぽくなったので、警察沙汰になった。さて、墓から声を初めて聞いた男は、友人の家に行き「俺のおかげで宝が見つかったのだから、その宝をよこせ」と言った。しかし、金を持ち去るために部屋に入ると無数の毒蛇が男



を攻撃しようと這ってきた。男はたまらず逃げ出した。

この話の教訓は、結果を得ることを望んでいるにもかかわらず、そのために進んで働こうとしない人がいるということだ。彼らは臆病すぎて最後まで夢を追い続けることができない。彼らは最初のうちには必然的な失敗に怯えている。勇気があり、勤勉で、忍耐力がある人だけが、大切な目標を達成できる。

### 「ラーマの思し召し」

ある村に、機織りがいた。彼は村の市場で品物を売って生計を立てていた。彼はとても敬虔な人だった。お客が彼に布地の値段を尋ねると、機織りはこう言った「ラーマの思し召しによって、糸の値段は1ルピー、工賃は4アナです。私の利益は2アナなので、布の値段はラーマの思し召しによって1ルピー6アナです」。誰もが彼を信じて布地を買った。

ある夜、彼は村の礼拝堂に座って神の御名を唱えていた。そのころ盗賊の一味が村の金持ちの家を襲撃した。彼らは略奪品を運ぶ男が欲しかったので、機織りを捕まえて、荷物を運ぶように強要した。しかし少し行くと警察が来るのが見えたので、盗賊たちは逃げ出した。機織りは荷物を持ったまま警察

に捕まり、牢屋に入れられた。翌朝、長官の前に引き出され、昨夜の出来事を説明するよう求められると、「ラーマの思し召しにより私は村の寺院で神の御名を唱えていました。するとラーマの思し召しにより盗賊たちは私を捕まえて、頭に彼らの荷物を載せました。しばらくしてラーマの思し召しにより警察が来て、盗賊たちは逃げ出し、ラーマの思し召しにより私は捕らえられました」。

長官は状況を理解し、彼が信心深いことがわかったので釈放した。

それから機織りは、「ラーマの思し召しにより、私は再び自由になりました」と言った。

### 忘れられない物語

#### 「大富豪の息子の物語」

あるところに、巨万の富を持つ大富豪がいた。彼にはまだ赤ん坊のひとり息子がいた。大富豪は全財産を赤ん坊に遺したので、幼い男の子が巨万の富すべての持ち主になった。1歳そこらの男の子がびっくりするような大富豪になったのだ。男の子は莫大な富の所有者となり、それ以上に必要なものは何もなかった。彼が全財産の所有者なのだから。これが男の子の本当の状態だった。

しかし事実上、実際の男の子の状態は

どうだっただろうか？それはこうだ。その男の子が大富豪であることは事実だが、いくつかのことが原因で大富豪であることを実質的に楽しむことはできなかった。第一に、未成年なので、相続に関する法律によりその地位を利用できなかった。成人年齢にならなければ、自分の莫大な富とそれに伴う地位の有効かつ実質的な事実上の所有者になることはできないのだ。男の子は法規制により成人年齢に達するまで後見人の管理下に置かれていた。したがって、この小さな大富豪は後見人の言うことを聞き、何か欲しいものがあれば後見人を喜ばせようと努力しなければならなかった。第二に、父親は、男の子がその国の法律が定める成年（18歳、21歳など）に達して財産を手に入れる際の条件をいくつか定めていた。男の子はこれらの条件を満たさなければ、その財産を受け取る資格がないのである。

父親は例えば遺言書に「息子が成人に達したとき、酒もたばこも飲まない、ギャンブルをしない、家族の名誉に恥ずべきことを何もしない、という条件を満たしていれば、財産を与える、等々」と書いた。さて、男の子が大富豪であることは事実であり、誰もそれを変更することができないことは分かる。しかし、それでも法律と父親の遺言が求める条件が満たされるまで、男の子が大富豪であるという事実（それ

が真実で現実であっても）は、決して彼を現在の制限から解放することはなく、欲しいものがすべて手に入る、ということにはならない。これ以上何も必要ないというような大富豪としての地位を経験したければ、彼は大人になるまで辛抱強く待ち、父親の遺言条件を満たすように注意しなければならないのだ。そうしてやっと、豊かさ、力、独立とはどういうものかを完全に知ることとなるだろう。

しかし、実際そうなる前に自分の地位の力を使って行動しようとしても成功しない、ということを男の子は理解する。例えば彼が1万ドルで自動車を注文したとしても、ディーラーは微笑むだけで車は手に入らない。ただし、後見人が相続人に代わって買うことはできる。相続人は富の本当の所有者なのに買うことができない。これは実に特殊な状況ではないだろうか？

同様に、本当はあなたはサッチダーナンド、絶対の存在・知識・至福であるが、すべての条件（すなわち、徳を育て悪徳の根絶する）を満たし、集中、瞑想などのあらゆる準備修練を苦しくてもやり遂げなければならない、ということを理解する必要がある。

## 今月の思想

人生の真の喜びとは、素晴らしいと思

う目的のために仕えることである。この世は私を幸せにしてくれない、と不満を言いながら、狭量で自分本位な不快不満の塊になるのではなく、自然児であること。

私の人生はコミュニティ全体のものであり、生ある限り、コミュニティのために出来ることをするのは光栄なことである、と私は考える。とことん自分を使い果たして、死にたい。なぜなら、懸命に働けば働くほど、私は生きるのだから。私は人生そのものに歓喜している。私にとって人生は短いろうそくではない。人生とは、今、手にしている光り輝く松明（たいまつ）のようなものである。私はそれをできるだけ明るく燃やして、次の世代に引き渡したいと思っている。

…ジョージ・バーナード・ショウ

**発行：日本ヴェーダーンタ協会**

249-0001 神奈川県逗子市久木 4-18-1

Tel: 046-873-0428

Fax: 046-873-0592

Website: <http://www.vedanta.jp>

Email: [info@vedanta.jp](mailto:info@vedanta.jp)



## Photos from Trip to India



Arrival at Delhi Airport



Swami Suhitananda, Vice President



Belur Math



Sarada Ma did Panchatapa here



Swami Vivekananda's Ancestral Home





Sister Nivedita Museum



M's House



Kamarpukur



Barasat Ashram



Barasat Ashram

• Thought of the Month •

This is the true joy in life, to be used for a purpose recognized by yourself as a mighty one, to be a force of nature instead of a feverish, selfish little clod of ailments and grievances complaining that the world will not devote itself to making you happy.

I am of the opinion that my life belongs to the whole community and that as long as I live it is my privilege to do for it whatever I can. I want to be thoroughly used up when I die, for the harder I work the more I live, I rejoice in life for its own sake. Life is no brief candle to me; it is a sort of splendid torch which I've got a hold of for a moment, and I want to make it burn as brightly as possible before handing it on to future generations.

- GB Shaw